

注：以下は著者原稿の一部引用であり、公開されたものと同一とは限りません。

TheLibertyWeb 2025 年 3 月号 (1 月 30 日発売)

石破首相よ目を覚ませ！ トランプに続き「脱炭素」から撤退を

太陽・火山・雲——人智を超えた自然変動を無視した「CO₂ 温暖化説」は崩れつつある

筑波大学名誉教授 田中博（プロフィール）（たなか・ひろし） 米ミズーリ大学で Ph.D 取得。アラスカ大学地球物理学研究所助教などを
経て、筑波大学地球科学系講師・助教授・教授、生命環境科学研究科長、日本気象学会常任理事などを務める。著書に『地球大気の科学』（共立
出版）など。

「なんだこれは！」

世界の平均気温の推移をウォッチしていた田中博・筑波大学名誉教授（大気科学）は、思わずこうつぶやいたという。 2023 年
夏、地球全体の平均気温が突如、観測史上最高値に跳ね上がった。あまりの上がり方に研究者たちは驚いた。だが異常高温はその後
も収まらず、23 年、24 年と連続で、通年の平均気温も過去最高値を更新した。

「CO₂温暖化説」を唱える研究者たちが「そら見たことか」と色めき立つかと思いきや、逆の反応が巻き起こっている。

「異常高温を気候モデルで説明できない。我々は未知の領域に入っているかもしれない」

米NASAゴダード研究所のギャビン・シュミッド所長は、科学雑誌ネイチャーへの投稿でこう嘆く。現在観測されている気温情
報は、CO₂温暖化の根拠となってきた気候シミュレーションを大幅に上回り、モデルの信頼性そのものが揺らいでいるというのだ。

一体、何が高温を引き起こしているのか。多くの科学者が血眼になって研究しているが、確たる答えは出ていない。少なくとも、
CO₂でないことは確かなのだ。そのため一部からは、「人類は多くの科学者が主張しているほどには地球温暖化を理解していない」
(*1) という、根本的な問題提起も出ている。

トンガ噴火が引き起こした前代未聞の現象

説得力のある説もいくつか出ている。だがそのどれを見ても、「人間が出すCO₂が調節ツマミのように地球気温を支配する」という考え方の、ある種の傲慢さを実感させる。

前出の田中博士は語る。「私が最も有力だと思っているのが、22年1月に発生したフンガ・トンガ大噴火の影響です。日本にまで津波や音波が届いた、観測史上最大規模の海底火山爆発でした。この時、前代未聞の現象が起きました。なんと1億5000万トンもの水蒸気が大気中に噴出し、雲ができる対流圏のさらに上、『成層圏』に供給されたのです。その水蒸気は1年以上かけて、地球全体に広がりました。この層は本来、乾燥してカラカラの領域なのですが、突如にしてビタビタになり、水蒸気量が10%も増えたことが観測されました。

そして水蒸気というのは、問題視されてきたCO₂の数倍もの温室効果があります。これが一気に地球の気温を押し上げたと見られるのです」だとすれば私たちは今、大自然が生み出した「本域」の温室効果を目の当たりにしていることになる。「しかし、雲も存在しない成層圏に大量の水蒸気が注ぎ込まれるなど、誰もシミュレーションしたことのない想定外の事態です。気候にどのような影響を及ぼすのか、誰にも分かっていません」（田中博士）

世界の雲がなぜか減っている

次に有力なのが、「世界規模でなぜか雲が減っている」という現象だ。言い換えれば「曇りの日」が減っていることが観測されており、日射が増えて気温が大幅に上昇しているという。これは宇宙の側から見ると、地球表面の白色（雲）が減り、黒色（海）が増えることで、太陽光の反射率が減り、熱の吸収量が増えていることになる。田中博士はこう語る。

「地球の太陽光反射率（アルベドと呼ぶ）は以前、一定の平均値を中心に周期的に上下していました。しかし2000年以降、なぜか一方的に下がり始めており、この20～30年で1～2%も減ったのです。そうすると太陽放射も1～2%増えたことになり、これは観測されている温暖化も説明できてしまうほどの変化です。しかしその反射率の低下（雲の減少）がなぜ起きているのかは、未だ解明されていません」

いずれにせよ異常高温の背景に、人智を超えた大変動が起きている。従来のCO₂温暖化モデルが見直され、複雑かつ壮大な自然変動に注目が集まる契機となるかもしれない。

科学者たちが無視する太陽光変動

気温を左右するダイナミックな「自然変動」について田中博士はさらに、これまでCO₂温暖化論者が軽視してきた、決定的な盲点が存在すると訴える。それが「太陽活動そのものの変動」だ。「水蒸気や雲も気温を大きく左右しますが、何より地球に熱を供給する根源は太陽光そのものです。このエネルギーは1㎡あたり1361Wと大きく、1000Wの家庭用ドライヤーで1m離して温めるのと同じくらいの熱量です。これが1～2%変動するだけで、温暖化のストーリーが全て吹き飛ぶくらいの変化を、地球の平均気温に与えます。

そして現に、太陽活動そのものの変化によって、中世の温暖期や、16～19世紀の小氷期などの気候変動が引き起こされてきたと、多くの研究者が考えています。しかし欧米の主要な研究機関による気候モデルは軒並み、この太陽光強度を、一定の『太陽定数』と仮定して、100年スケールの気候の分析や予測を行ってきたのです」

本当は分かっている太陽光変動

実は現在の科学では、本当の意味で厳密に、太陽光の変動を観測することができない。まず、中世温暖期や小氷期など古い時代の太陽光の変動は、今のところ知る術はない。近年も、人工衛星による計測が行われているが、一つの衛星は機械の劣化により10～20年程しか使えない。したがって長期の太陽光の変動を知るには、複数の衛星データをつなぎ合わせなければならない。だが厄介なことに、衛星によって10Wレベルの差が出る。それは計器の性能差かもしれないし、時期による太陽活動の差かもしれない。どちらかを区別するのは本来、難しい。

だが科学者たちは根拠なく、「太陽定数が一定」という仮定のもとで、観測結果のバイアス補正を行ってきた。その結果、「やはり太陽光は一定」という「統一見解」がいつそう強まり、それを前提として、気候モデルなども構築されてきた。循環論法のような妙な話だが、これが科学界の実情だという。「太陽光は長期的に変化しないという前提は、もはや政治的圧力になっています。ここが崩れたら温暖化仮説は崩壊するからです」（田中博士）

分かっている「太陽」は無視しCO₂を主犯人に

気候モデルにおいて「太陽光は一定」と仮定した結果、「近年観測された温暖化はCO₂が主犯人」ということになってしまった（＊

2)。そして将来のシミュレーションをしても「CO₂を減らさないと大変なことになる」という結論が導き出されることになった。もちろん、この仮定には根拠がない。従って、太陽光が変動し温暖化や寒冷化が起きて来たことがいずれ分かれば、「CO₂温暖化」説はすべて嘘と分かり、総崩れとなる。

田中博士は語る。「長い歴史のなかで太陽が、どのようなメカニズムで、どの程度変動してきたのかは正確には分かっていません。分かっていないので彼らは『太陽光を一定』と仮定し、その結果、CO₂を犯人としたのです」

太陽光の長期変動のように「解明できないものは、存在しない」——こうした前提でつくられたモデルによって、科学者たちは地球の過去の気候を説明し、未来の気候を予測しようとしてきた。これが人為起源温暖化説の根底にある、思想的な問題と言える。

「気候メカニズムは分からないことばかりです。太陽光の変動も未解明であり、そこに反射率（アルベド）や火山の影響などが複雑に絡み合っています。科学の不確実性をしっかり認識したうえで議論すべきなのですが、今の科学はそうなっていません」（田中博士）

トランプ革命は科学機関にも及ぶ

こうした状況も、トランプ政権誕生によって変わると、田中博士は期待を語る。

「トランプ氏が脱炭素から撤退するには『温暖化は人為起源ではない』という科学的根拠を示す必要があります。その時、トランプ氏のブレーンだった温暖化懐疑派の科学者や、共和党議員に議会公聴会などで懐疑論を語ってきた研究者たちに、光が当たるようになるでしょう。またトランプ氏は米海洋大気局（NOAA）や米航空宇宙局（NASA）など、主要科学機関のトップも、軒並み懐疑派に入れ替えると予想されます。傘下の研究プロジェクトの人事や資金配分も大胆に変わると見られます。やがて科学界は、『温暖化の大半は自然変動である』という論調になるでしょう」

政治的にも科学的にも、「脱炭素」路線は崩壊へと向かっていくだろう。日本もそれに合わせ、舵を切る時だ。

（＊１）宇宙物理学者のデイビッド・ホワイト氏。

（＊２）これまで観測された温暖化を「太陽光が一定」では説明できないので、「CO₂の増加」でチューニング（調整）し、再現できるようなモデルをつくった。

TheLibertyWeb 2025 年 3 月号 (1 月 30 日発売)

[もらってばかりの人生は駄目！ バラマキ亡国論「ザ・リバティ」3月号\(1月30日発売\) | ザ・リバティ Web/The Liberty Web](https://the-liberty.com/article/21932/)

<https://the-liberty.com/article/21932/>

<https://the-liberty.com/article/21922/>

【特集】石破首相よ目を覚ませ! トランプに続き「脱炭素」からの撤退を



米トランプ政権が「パリ協定」から離脱し、世界の脱炭素運動は転換期を迎えている。
日本もエネルギー政策を大転換させる時だ。